臓器制御外科学
（旧・外科学第一講座）

大塚　将之

第一高等中学校医学部の初代三輪徳寛教授に続いて1924年，高橋信美教授が外科学を主宰することになる。1927年，第二外科が独立し，ここに外科二教室制となり，名実ともに高橋教授を主任とする第一外科教室が発足した。

1941年，高橋教授の後任として，東京大学河合直次講師が第一外科主任教授として赴任した。河合教授はわが国の結核外科の歴史にその名を残す「肺縫縮術」を考案した。

綿貫重雄教授

1959年，綿貫重雄助教授が第一外科教授に就任。1962年，一時，第一外科に同居していた肺癌研究施設は教室より離れ，別に運営されるようになった。1977年３月，小児外科が診療科として独立したため，12名の教室員が移籍した。綿貫教授は1968年第30回日本臨床外科医学会，1970年第25回日本大腸肛門病学会，1974年第15回日本臨床細胞学会の会長を務めた。

伊藤健次郎教授

後任に伊藤健次郎助教授が昇任した。伊藤教授のころより，従来の消化器外科や内分泌外科に加えて，心臓血管外科の臨床，研究が行われるようになった。伊藤教授は1977年第６回栄養・輸液研究会，同年第10回甲状腺外科検討会を主宰した。また，1980年第17回術後代謝栄養研究会および第20回完全静脈栄養研究会を主宰した。

奥井勝二教授

同年奥井勝二講師が教授に昇任した。奥井教授は若手医局員の研究に対する情熱を自由に伸ばすよう指導され多大な研究成果を修めた。また，1987年第42回日本大腸肛門病学会，1988年第29回日本臨床細胞学会，1989年第26回日本外科代謝栄養学会を主宰した。

中島伸之教授

1991年，奥井教授の後任として，国立循環器病センターの中島伸之心臓血管外科部長が赴任した。このころより研究活動はさらに活発になり，各領域で多大な成果をあげた。具体的には乳腺領域では乳管内視鏡を用いて診断技術の向上を図った。胃癌では術前化学療法，超音波・CT診断，進行度に応じた合理的治療，大腸癌においては種々の画像診断，早期癌の内視鏡的切除，進行癌の縮小および拡大手術，直腸癌の術前照射療法，再発癌の集学的治療が検討された。また，肝胆道領域では拡大手術時の臓器保護や血行再建術，特に左腎動脈を用いた門脈再建，食道領域では切除不能癌に対する照射療法やステント留置術，膵臓癌では拡大リンパ節郭清や術中照射による手術成績向上などが検討された。中島教授の専門である心臓血管外科領域では，胸部大動脈瘤手術の補助手段としての超低体温循環停止法の検討や，わが国でもトップレベルを誇る慢性肺動脈血栓塞栓症の外科治療において著しい進歩がみられた。また，1998年には第13回日本静脈栄養研究会を，1999年には第29回日本心臓血管外科学会を千葉市幕張にて開催した。

宮崎勝教授

2001年４月には中島教授の後任として宮崎勝教授が就任した。宮崎勝教授は当時教室の担当した外科領域で消化器外科，心臓血管外科，および乳腺甲状腺外科を発展するべく業績を挙げた。当時医学部においての外科診療担当領域の再編の動きの中，外科領域ではまず旧第一外科（現在の臓器制御外科）と旧第二外科（現在の先端応用外科）の外科担当領域の再編成する方向性が，検討委員会の決定に従って教授会においてもその方向性が決定された。当時の第二外科の落合武徳教授と宮崎勝教授の話し合いでその方向性を承認し，まず消化器外科領域の内の食道胃腸外科領域と肝胆膵外科領域を統一することになり，臓器制御外科が診療科として肝胆膵外科を担当し，先端応用外科が食道胃腸外科を診療科として担当することになった。尚心臓血管外科はそのまま臓器制御外科が担当し，乳腺甲状腺外科は両方の教室で担当して診療科として合同で協力していくことになった。その後2009年秋に心臓血管外科講座が誕生して臓器制御外科学から心臓血管外科は担当が外れて独立することになった。その後は臓器制御外科教室として診療面での担当科は肝胆膵外科と乳腺甲状腺外科を担当して現在に至っている。宮崎勝教授は専門である肝胆膵外科領域において教室業績を挙げ，日本の胆道がん診療ガイドラインを委員長としてまとめ，2007年に第１版を出版した。また2012年４月には第112回日本外科学会定期学術集会会頭を，また2013年には第49回日本胆道学会会長を主催する予定になっている。

「千葉大学五十年史」[1999年（平成11年）11月刊] の記述を一部転載・加筆させてもらいました。

（おおつか　まさゆき）

2010年12月 年末教室まとめの会において